

生涯学習だより



さとごころ
郷心～「郷土に学ぶ【なつ】……ほこれる郷土」
～かみしほろの健やかな育ち～

年間テーマ 「わが町の教育」

◇私の小中学校の思い出くその一◇



帯広駅にて、本人です。 ↑

生、中一・二年生、中三年生と分かれ、生徒数百十
二人と覚えています。多い学年は十五・十六人、少
ない学年は十・十二人でした。

秋になると校舎が出来上がり、新しい教室で勉強
を始めました。冬は大雪が降り、大人の腰ぐらいま
で降ったことがあ
りました。父親に
馬そりで学校に送
ってもらい、やつ
との思いで学校に
着きました。と、
思ったら、二・三
人しか来ておらず、
臨時休業になりま
した。送ってもら
った馬そりに乗っ
て家に帰りました。
(田中 松雄)



完成した新校舎です！

◇夕涼み会◇

七月四日(土)、こども園で
夕涼み会が行われました。この
行事は今回初めての取組で、今
年度は年長児を対象に行いまし
た。子ども達はこの日に向けて
盆踊りの練習をしてきました。
「夜の散歩」で虫を捕まえるた
めの罫を準備して公園に仕掛け
て、当日を楽しみに迎えました。

当日はいつもと違う夕方の登
園に、ワクワクしながらやって
来た子ども達。残念ながら悪天
候だったため、始めは室内での
開催となりました。元気に盆踊
りを踊ったり、ヨーヨー釣りを
やったり、ゴム鉄砲の当て・輪
投げ等の出店コーナーを楽しん
でいました。その後は中央公園で、
夜の散歩の代わりに、園内での
肝試しを行いました。残念なが
ら虫捕りはできませんでした
が、子ども達はオバケに大興奮！
大号泣の子もいましたが、賑やか
で印象深い肝試しになりました。
雨が上がったため、最後は、外
で花火をしました。打ち上げ花
火を見ている時、「わー！」「キ
レイだね！」と歓声が上がって
いました。

普段とは違った夜ならではの
雰囲気の中、子ども達のたくさ
んの笑顔が見られ、楽しい時間
を過ごすことができました。

(西田 知世)



◇国語塾通信二く美しい生き方とはく◇

少子化の波は上土幌町にも及び、今年度で北門小学校の閉校が決まりました。糠平小学校の児童は微増ですが、来年度以降は微減です。萩ヶ岡小学校は来年度学級減のようです。複式校に勤務する教員として、閉校が進むことは辛く悲しい現実です。但し、子ども達の立場で考えれば、多人数での学びを経験することは重要なことであり、不可欠なものでもあります。

昨年、「児童同士の交流の場を教師として提供できないものか」と考えて取組を始めたのが「土曜国語塾」です。時間帯が十一時〜十二時半という中途半端な時間設定は、糠平小学校の子ども達が十勝バスで市街まで来る際に合うようにしたためです。せつかく集まったのに四十五分だけではもったいないと考え、時間は小学校の二時間分の九十分間としました。これで、終了時刻の十二時三十分が決定したのです。

国語塾ではわりと文学的文章(物語)の読解を扱うことが多くあります。小学校のどの学年にも掲載されていて、『アレクサンダーとぜんまいねずみ』『きつねのおきやくさま』『モチモチの木』など、記憶に残っている方も多いのではないのでしょうか。

これらの文学的文章にはそれぞれ「主題」(作者が一番伝えたいこと)があります。小学校ではあまり扱うことはありませんが、中学校では重要な学習用語として扱われます。先ほどの三つの話は、中心人物が自己中心的な思考から、山場の出来事によって大きく心情が変化します。そして、他者への思いが強くなり行動に移していきます。つまり、中心人物が「利己(自分の利益を優先)」から「利他(他者の利益を優先)」に変わるお話です。

私達は、美しい生き方に触れると感動するものです。でも、その正体をあまり知らずとしません。その正体は、自分の力を他者に貢献する行動であり、「利他の精神」なのです。実は、小学校の国語の教科書に載っていて、誰もが知っていることです。

町内には、ボランティアで読み聞かせをしてくれる「カッコウ」という団体があります。先日、糠平小学校に来校して下さり、子ども達にたくさん感動を与えてもらいました。市街から糠平までは往復一時間。無報酬です。そんな大人の皆さんがいる上土幌町は、素敵な町です。子ども達は、「カッコウ」の皆さんから、絵本の素晴らしさだけでなく、美しい生き方も学んでいます。子ども達が「利他の精神」を実践できるとは、私達大人が手本を示す以外にないのです。



(和嶋 康彦)

◇ママのつばやき②く夏!◇

やっと今年も遅い夏がやって来ました。夏というとお祭り!子ども達は、これから始まるお祭りが待ちきれず、焼肉や花火に胸がふくらんでいます。町内だけでも、ひふみ屋台村、ビアパーティ、子ども夏まつり、バルーンフェスティバル、花火大会、盆踊り!子ども達は、それ以外にも少年団や学校、学童のレクリエーション、糠平での虫捕りや川でのイベント、教育委員会のかみつきふるさと体感塾(キャンプ)等、楽しいことがいっぱいあります。

先日、学童のレクリエーションがありました。毎年、流しそうめんやお化け屋敷、新聞ホッケー、カレライス、スイカわり等がありました。特におもしろかったのが、雨天のため室内になった遠足の代わりにやった雑巾がけレースです。あえて準備をしなくても一人一枚タオルを持参すれば簡単にでき、必死になってやる子どものおかげでとても盛り上がりました。今年は、親子で風船リレーや箱から数字の入った紙を取り出して数の多いチームが勝ちという競技と陣地に玉を入れ合い、玉の数を競う競技を行いました。

私は今年初めて役員としての参加でした。学童レクリエーションは、特に働いている親同士でレクの企画も大変ですが、反面みんなので一つのことをやるって楽しいです。忙しい中でもみんなが参加してくれそうです。

子どもが喜ぶためにやるのが、親同士のコミュニケーションに繋がりが、いつもできない経験ができます。子どもって親が近くにいると本当に嬉しそうなんですよね。お互い忙しい分、役員でなくても協力して盛り上げてくれる親同士の連携、先生の温かさにも感謝します。人生ムダなことなんてないですよ!子どものために!そして子どものおかげです!(子どもがいなかったら、こんな経験できないのですから)



(吉田 恵)

◇スクール型からアイランド型へ：教室の座席配置を変える◇

僕が担任する三年生教室の机の配置をアイランド型にしました。ホテルの結婚式などで見るあの形です。僕が机の配置の基本をアイランド型にしたのは、これが二回目です。

考えてみると、小学校の先生は教室の座席配置にそれぞれ趣向を凝らすことが多いようです。もちろん従来から使われている教卓を前に置いて、子ども達が前を向いて座る形（スクール型）の教室もいっぱいありますが、おもしろい形のものも結構目にします。

小学校の先生が教室の配置を色々工夫するのはなぜだろうかと考えますと、これは、生活班の関係だったり、授業の仕組みとの関わりだったりするのだと思います。そもそも今までの形というのは、先生の話を生徒が聞くために適した形なわけで、一斉にたくさんさんの知識や教養を「説明」するのに向いているわけです。

僕がここ数年特に懇意にさせていただいている先生が埼玉にいました。岩瀬直樹さんという方です。小学校の先生でしたが、今春、東京学芸大学の教育大学院に転出してしまいましたので、もう現役の授業を見ることはできません。その岩瀬さんが、数年前に、教室の座席をアイランド型にすることで、自分の授業が必然的に変わっていく（つまり、生徒主体の生徒同士が話し合ったり一緒に課題に取り組んだりする形のコミュニケーション重視の授業に変わっていく）ということをおっしゃっていました。

僕が前回アイランド型にしたのは、育児休暇に入る前の年の今頃でした。今から四年くらい前でしょうか。でも、これはわずか一週間ほどで挫折しました。女子生徒が個人面談の時に、向かい合わせの席は嫌なので、元に戻して欲しいと言ってきたのがきっかけで、僕はそこで思い悩んだ末、元に戻したわけです。居心地の悪さを訴える生徒をそのままにしておけないなあというのが第一でした。僕自身の腹のくくり方も足りなかったということになります。

四年たって、今ならわかります。従来型の、先生と対面形式での一方的なレクチャー型の授業を受けることを苦痛と感じている生徒もたくさんいます。どっちがどっちってことでもないんだろなあ、と。そもそも、明治以来の伝統的な座席配置がスクール型ですから、子ども達にとっても（先生にとっても）、あの座席配置は、ある意味空気のように当たり前になっているわけです。なんだか違和感あるなあと感じる生徒が出てくるのは当然です。

要は教師自身の腹のくくり方の問題なんだなあ、今回改めて取り組みながらそう感じていきます。

実際このスタイルにし始めて、三年生の国語の授業の進め方はかなり変わってきていると自分で実感しています。二学期には、さらに協同的な学習が進められるように、ここは踏ん張って授業そのものを改めてみよう、今思っているところです。

（石川 晋）



◇あるがままに……◇

私が学童保育所に勤め始めて間もない頃の出来事です。子ども達がとても楽しみにしていた生涯学習ラリーがインフルエンザ蔓延のため中止になりました。当時四年生で、現在高校一年生になる子ども達も、たいそうがっかりしていたので、子ども達に何か提供できないだろうか？と考えたのが学童まつりの提案でした。

「四年生が主になって、『学童ラリー』のようなお祭り企画やってみない？」と声をかけたのです。景品つり屋さんに食べ物屋さん・射的屋さん・ピザ屋さん・ホットケーキ屋さん・ぬいぐるみ屋さん・ブレスレットを作って特別参加のお店屋さん等のスタンプカードから案内文まで自分達で企画運営をやったのける子ども達に感動しました。学校の先生方も学童を訪ねてきました。子ども達の背景には、子ども達一人一人のことを真剣に思う大人の愛情がありました。学校と学童保育所の連携が大切であると腑に落ちました。学校現場との連携は、保護者との連携にも活かせて、子ども達との親睦も深まりました。お祭りを大成功に収めた子ども達の力をもっともつと伸ばしてあげたい、沢山の体験をさせてあげたい気持ちで新企画も考えました。上士幌高校とご縁のあった植松務さんとのロケット教室が実現しました。教育委員会の職員がいたからこそ実現した懐かしい思い出です。

学童保育所は子どもにとっての「毎日の生活の場」なのです。『共働き・ひとり親家庭などの小学校の放課後（土曜日、長期休暇などの学校休日は朝から一日）生活を継続的に保障し、その事を通して保護者の働く権利と家族の生活を守る』それが学童保育の役割です。（月刊『日本の学童はいく』二〇一五年五月号より）

本町の学童保育所の始まりは、青少年会館に管理人さんがいて、共働きの子ども達はそので時間を過ごして帰るのが当たり前でした。その後、子どものお世話して下さる方を、保護者が見つけて、本格的にスタートしました。親御さん達と潮干狩りなど楽しい親子企画を実施したり、学童の思い出文集等も手掛けていたそうです。現在も毎年父母の会で学童の思い出文集を制作していただいています。

親が働いているからかわいそうではなく、学童に来ているからこそ楽しい体験ができる。当初は私も、学童に来ていない子どもから「学童っていいなあ」と思ってもらいたい野心に燃えていました。七年前の新米学童指導員の私は、子ども達・保護者の方・仕事仲間に支えられ心折れることなく続けてまいりました。感謝の気持ちでいっぱいです。

（是澤 芳枝）



モデルロケットが勢いよく飛び立った発射実験